

室生寺

室生山の麓に立つ室生寺は、仏教の一派である真言宗の室生寺派の総本山である。この地域は古代の時代から霊的な場所として知られており、人々は龍神と呼ばれる神を信仰していた。龍神は山の洞窟に住んでいると信じられていた。干ばつの時、天皇は使いの者を派遣して、神に対する雨乞いの祈祷をさせた。室生寺が創設されると、ここが龍神信仰の場となった。寺の歴史は、8世紀の後半に病気に苦しむ山部親王（後の桓武天皇、737～806年）のための祈祷の儀式がここで行われたことを起源としている。天皇の命令により、興福寺の高僧であった賢璟（705～793年）が最初の建物をつくり、その弟子の修円（771～835年）がいくつかの建物を付け加えた。

室生寺は女性の信仰のための場所として有名である。女性は高野山の主な真言宗の寺院に入ることが禁じられているが、室生寺は女性を受け入れたため、鎌倉時代（1185～1333年）から「女人高野」として知られている。今日でも、この寺の参拝客の8割を女性が占めている。室生寺には十一面観音像や釈迦如来像、金堂、五重塔など、数多くの国宝がある。また緑豊かな自然もこの寺の見所である。四季を通じて美しいが、特筆すべきなのが桜、楓の紅葉、そしてツツジである。